

東京湾内湾の谷津干潟の魚類相

Ichthyofauna of Yatsu Tidal Flat in the inner Tokyo Bay

○荒尾 一樹・馬渡 和華・芝原 達也 (習志野市谷津干潟自然観察センター)

・大原 庄史 (NPO 法人生態教育センター)

・風呂田 利夫 (東邦大学理学部東京湾生態系研究センター)

○Kazuki ARAO, Kazuka MOTAI, Tatsuya SHIBAHARA (Yatsu-Higata Nature Observation Center), Masashi OHARA (Center for Ecological Education) and Toshio FUROTA (Tokyo Bay Ecosystem Research Center, Toho University)

k-arao@seibu-la.co.jp

東京湾内湾に位置する谷津干潟は、東京湾の埋め立てが進む中、多くの人々の保護活動により残された干潟である。渡り鳥の中継地として重要であることから 1993 年にラムサール条約の登録湿地となり、鳥類や底生動物の調査が行われている。しかし、魚類に関する調査はほとんど行われておらず、アカエイやボラ、トビハゼ、マハゼの生息が知られている程度である。そこで、谷津干潟自然観察センターでは魚類相を明らかにするために 2017 年 5 月から調査を開始したので、これまでに得られた結果を報告する。

谷津干潟は千葉県習志野市に位置する面積約 40ha の干潟である。谷津川と高瀬川で東京湾とつながっており、潮の干満とともに海水が入り出る。流入河川はなく、調査時の塩分は 2.44~2.87%であった。干潟はコンクリートで護岸されており、護岸沿いには部分的にヨシ群落がある。底質は大部分が砂泥で、一部は軟泥である。調査は主に谷津川、高瀬川へと接続する谷津干潟内の滞筋で行った。魚類の採集には小型定置網、投網、手網を使用した。採集した魚類は種の同定後、その場に放流したが、一部は標本として保管した。また、補足として調査期間・調査日以外に採集・撮影した魚類についてもあわせて報告する。

調査の結果、13 目 34 科 52 種の魚類を確認した。科別にみるとハゼ科が 13 種と最も多かったが、ハゼ科の種数の割合は 25%と低かった。また、生活史型別にみると、河口魚は 10 種、海水魚は 38 種であり、海水魚と比べ河口魚の種数が少なかった。谷津干潟には流入河川がなく、塩分の変動も小さいため、河口魚や回遊魚の種数が少ないものと考えられる。しかし、谷津干潟と同様に閉鎖性が高い潟湖である市川市にある新浜湖では河口魚の種数が多い。新浜湖は江戸川の河口付近に位置するが、谷津干潟には近くに大きな河川がないため、海水魚の種数が優先するといった特異的な魚類相が形成されたものと示唆された。

本調査で環境省レッドリスト掲載種 (ニホンウナギ、クルマサヨリ、トビハゼ、マサゴハゼ) など注目すべき魚類も確認した。今後も情報を集積し、魚類の生息場所としての谷津干潟の役割を把握し、魚類相の変化にも注視する必要がある。

キーワード: 東京湾, 内湾, 干潟, 魚類相, 絶滅危惧種